

□ 次の文章をよく読んで後の問題に答えなさい。

子どもたちは無力である。それゆえに、子どもは、まずおとなによって「守られるべき存在」であり、同時に、「将来生きていくのに必要な力をひとつひとつ身につけていく存在」であると、一般には考えられている。

現に、昨今は、子どもが被害者になる大きな事件が起きるつど、「子どもを守れ」という声がさかんに交わされ、また一方で、子どもたちの学力低下が騒がれて、「基礎学力をつけ、生きる力をつけよう」という声が学校を大きくおどっている。この二つは、いずれもその表面だけ見ればaセylonで、異論の余地などないように見える。しかし、その後で、考えなければならない裏面の問題が見逃されている。

子どもは、**I** 弱い存在で、しばしばおとなのbボゴなしに生きられない。**II** 子どもはただただ弱いだけでなく、ひたすら守られなければならないわけではない。**III** もっぱら守られるだけの存在から、二十歳で突然におとなになって、独り立ちするなどということがある。

裏返して言えば、どんなに小さな子どもでも、ときに守ることをやめて、子どもに任せなければならないことがある。そのなかで子どもは、自分の生活を自分の力で切り開く。いや、子ども自身が、年下の子どもたちや自分より弱い人たちと出会って、その人たちを守らなければならないことだつてある。それは生き物としての人間が、その育ちのなかで予定されている一つの自然であると言つてよい。

じつさい、この日本でもほんの数十年前も、^{よもや}廻れば、六つ、七つの幼い子どもが、背中に赤ちゃんをおんぶして遊んでいる姿が、日常の風景としてあつた。それは単に生活が貧しかったということではない。人は守られつつ、同時に守る。守りつつ、同時に守られる。そのことは子どもに限らず、人一般にあてはまる、いわば人間の自然である。下の弟や妹を背中におんぶして遊ぶ子どもの姿は、その人間のありようの一つの象徴だつたともいえる。

ここで私は、子どもたちの世界にそのような情景を復活させようと言いたいのではない。それはきょうだいがたくさんいて、子どもたちが地域でe群れ、子どもたちに親から任される生活領域があつた時代だからこそ見られたものであつて、そうした状況が失われた現在、**①**これを復活させることなど、簡単にできようはずがない。ただ、そのうえで「守る・守られる」という人間の自然まで失われたわけではないことは確認しておかなければならない。

人間というのはdキミョウな生き物である。自分の力を使って自分の利益になることを行い、それがうまくいけば嬉しいというのは、個体が生き残っていくために当然のことだが、自分の力を使って何かをやつて、他者、とりわけ身近な他者が喜んでくれると、それがまた嬉しい。そういう生き物なのである。これもまた人間の自然であつて、ほかの生き物にはあまり例がない。思えば、親が子どもを喜ばせようと、美味しいものを食べさせたり、面白いおもちゃを買いたたりすること自体が、この人間的な喜びよのeテンケイである。子どもの笑顔を見たい親たちにとって、子どもを守ることそのものが子育ての喜びとなる。教師もまた、子どもの喜ぶ姿を見ることを教育の喜びにしている。では、子どもの方はどうなのだろうか。

子どもたちが周囲から守られて、喜びをあたえられる機会は、昔に比べて圧倒的に増えている。逆に何かを任されて、相手を喜ばせる体験を、いまの子どもたちはどれくらい味わっているだろうか。まだ社会全体が貧しくて、子どもが一人の生活者として働かなければ家が回つていかなかった時代には、子どもたちはA否応なくそうした体験を味わつた。子どもが働くのが当然というなかでは、親が喜ばせてくれるわけでも、喜びをおもてに表してくれるわけでもないのだが、それでも子どものなかには、自分が役立っているという感覚が確実にあつて、それが生活者としての子どもの自信となつた。

私が小学校四年生のときにこんなことがあつた。麦刈りが終わった頃のことだつたが、私は盲腸炎になつて手術をし、一週間ほど入院したのち、しばらく学校を休んで家で寝ていた。ちょうどそのとき麦の脱穀だつこくをしなければならなかつたのだが、B病み上がりの私はもちろん作業に参加しなくてよかつた。農協から借りてきた脱穀機だつこくきを使って家の庭で脱穀するのだが、脱穀機は、作業が終わればすぐに次の家にまわすことになつている。そのため家族総出で一日がかり、一気にやらなければならない。これがけつこうきつい。すごいほりが立つので、家の雨戸は締め切つている。私は雨戸のすぐ内側の暗い部屋で布団を敷いて、一人寝てラジオを聴いていた。そのとき私は子ども心に、自分ひとりだけ仕事をせずに、楽をさせてもらつて嬉しいような、みんなが大変な仕事をやっているのに申し訳ないような複雑な気分であつたことを、いまでもよく覚えてる。子どもは子どもなりに、家族の生活を気づかい、そのなかに**②自分の位置と役割**を感じていたのである。

もちろん、いまの子どもたちにも、相手を喜ばせたい、相手に役立ちたいという心情は、自然にそなわつている。母親がインフルエンザで高熱を出して寝込んでしまったとき、五歳の子どもでも、なんとかしなければならぬと思う。そうして倒れた母親になんとか食べさせたいと、見よう見まねで、おにぎりを作り、漬物を切つて、母親の枕元におく。その気持ちがあつて、母親は食欲がなくても無理して一口食へて、「美味い」と言う。それだけで子どもは嬉しくなる。人間というのは、そういう生き物らしい。

しかし、**③**今日のように経済的に豊かな社会になつて、生活のほとんどが貨幣でまかなわれるようになると、子どもに頼り、子どもに任せる領域がどんどんと減つてくる。それにつれて、子どもたちは自分の力を使って役立つ機会を失い、結果として子どもは「ひたすら守られる存在」にされてきた。

「子どもを守れ」というのは当然のことである。しかしおとなたちが善意で子どもを「ひたすら守る」とき、それはかえつて子どもたちから相手に役立ち、相手を喜ばせて喜ぶという人間の自然を奪うことになる。子どもに対する、この**④善意に基づくある種の鈍覚**に、私たちはどこまで気づいているだろうか。〈以下略〉

問一、——線 a、「セイロン」、b、「ホゴ」、c、「群れ」、d、「キシヨウ」、e、「テンケイ」のカタカナは漢字に直し、漢字はその読みをひらがなで答えなさい。

問二、本文は、内容から大きく三段落に分けられます。二段落目と三段落目の最初の五文字をそのまま抜き出しなさい。

問三、空欄 I II III にふさわしい語を次のア～エの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア、しかし イ、たしかに ウ、そもそも エ、そこで

問四、——線①「これ」の具体例にあたる部分を本文中から二十一字で探して、その最初と最後の三文字をそのまま抜き出しなさい。

問五、——線 A「否応なく」B「病み上がり」の意味としてふさわしいものを次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

A、否応なく
ア、むりやりに
イ、喜びとともに
ウ、何の期待もなく
エ、意味もわからず
オ、見返りのないまま

B、病み上がり
ア、病気がすっかり治って絶好調の時
イ、病気が一向に治らず調子でない時
ウ、病気が治ったばかりで本調子でない時
エ、病気が進行して回復の見込みがない時
オ、病気が病気として意識されないでいる時

問六、——線②「自分の位置と役割」とはどういうことですか。本文の言葉を使って二十五字以内で説明しなさい。

問七、——線③「今日のように経済的に豊かな社会になって、生活のほとんどが貨幣でまかなわれるようになる」とありますが、あなたの生活の身近なことの中で、これにあたりと考えられる具体例を一つ挙げなさい。

問八、——線④「善意に基づくある種の錯覚」の説明としてもっともふさわしいものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、親切心によって取り組んだことが、実際は相手のためにはならず、かえって良くない結果を招いていること。
イ、子どもに対する理屈では説明のつかない親からの愛情は、子どもの実際の姿を間違っただらえさせてしまうこと。
ウ、自分の良いと思っっていることは誰にとっても良いことだとかたくなに信じて、親が子どもにも強要してしまっこと。
エ、相手に役立ち、相手を喜ばせて喜ぶという人間の自然の姿について理解できていない親は子どもをおびえさせること。
オ、子どもが当然しなければならない家の手伝いを、親が先回りして何もかもやってしまい、子どもの時間を奪うこと。

□ 次の文章をよく読んで後の問題に答えなさい。

我々は食へ続けなくては生きていけない。食糧問題というのは、我々の生命に直接影響している最重要課題の一つだ。また、医食アドウゲンという言葉もあり、食料と医療の問題は密接に関わっている。さらにこれは人口問題とも関連している。1970年に比べ、2005年で開発途上国の人口は倍になり、世界全体でみると小麦の需要は約2倍、大豆の需要は約5倍に膨れ上がっている。この需要の伸びに比べて、供給の伸びは鈍化していて、さらに世界的に見て土地の砂漠化も進行しており、①農地が少なくなってきた。

先日、カンロ株式会社の中原靖生会長とお話しする機会があり、そこで食品がいかに無駄に廃棄されているか、という話を伺い、大変心を動かされた。少しその衝撃的なデータをご紹介します。

まず、日本での食料の廃棄量は年間2200万トンである。この内訳は、食品関連事業者から排出される分と家庭からの分がそれぞれ約半分ずつになっている。ただし、食料廃棄といった場合、例えば魚の骨や枝豆のさやなど食べられない部分も含まれる。そこで、本来ならば食べられるのに捨てられた量、つまり食べ残しや賞味期限切れによる廃棄などはどれくらいあるかといえば500万〜900万トンになるそうだ。

農林水産省が行った外食産業での食べ残し割合の調査では、結婚披露宴が最も食べ残しが多く、料理の2・5%が無駄になっているそうだ。次いで宴会が1・2%、宿泊施設が1%となっている。家庭で捨てられてしまう量は、2006年の調査でその食品使用量の3・7%に当たることが分かった。

コンビニから出る売れ残りの食品は年間約60万トンにもなる。人は1食で約500グラムを食べるとすると、毎日約300万食分の食事を捨てていることになる。コンビニ業界2位のローソンは、その廃棄量は年間約400億円、これは同社の経常利益とほぼ同じ額である。

このように廃棄が多いのは、その販売戦略だけでなく、賞味期限切れの基準が厳しく設定してあることも原因となっている。例えばコンビニのおにぎりは、持ちかえって食べることをbソウテイしているためにこの期限の2時間前に廃棄処分している。

賞味期限については、最近特に過剰なほど気にしすぎているように思える。以前は製造年月日だけが表示されており、いつまで大丈夫かは消費者が経験的に判断していたのだ。それが冷凍技術や輸入食品の増加などにより、②経験的な判断が難しくなってきたため、この期限表示が食品衛生法等で義務づけられるようになった。しかし、それを一律にあらゆる食品に適用する必要はないし、食品によっては製造年月日表示だけのものもあってよい。これだけでもだいぶ破棄の無駄は少なくなるし、少なくとも私は期限表示よりそれがいつ作られたのかの方が知りたいと思っている。私自身は、自分の目と嗅覚を頼りに、賞味期限を1ヶ月過ぎたクッキーでも自分で問題がないと判断すれば食べている。

いま世界の国々では、飢餓で瀕死の状態の人が8億人もいる。これは世界の人口の8人に1人の割合である。一方で、このように食料が余って捨てているところもたくさんある。このような③資源の偏在の問題も大きな無駄の一つだ。英語で、Waste not, want not. という諺があるが、これは、無駄がなければ不足もない、という意味だ。どこかで無駄にしているために、不足するところも出てきてしまう。

日本は、食料自給率が3%と極めて低いにもかかわらず、このような大量廃棄をしているのはやはり異常ではないだろうか。わが国の食料輸入総量は約5800万トンで、国内生産分を合わせると国内には約9000万トンの食品が流通している。その2割以上が捨てられているという事は、捨てるために輸入しているようにも見える。そして日本が捨てている量は、この困っている8億人に対して各国が食料援助している総量の約3倍にも相当している。この無駄はまったく馬鹿げている。

例えば、江戸時代からある天ぷらそばでさえも、日本は現在その食材の8割を輸入に頼っている。我が国のこの食料自給率の低さは、主要先進国の中でもA際立っている。アメリカやフランス、カナダなどは自給率は100%を超えているし、ドイツでも84%である。日本は特に野菜に関して、その国内消費量の6割を中国という一つの国からの輸入に頼っている。これは大問題で、将来にわたって不安定供給されるかどうかは疑わしい。その理由の一つが、中国の人口問題である。中国の現在の人口は13億人だが、20年後には16億人になるといわれ、新しく日本が二つ分増える計算になる。すると、中国国内での深刻な食料不足も懸念されるので、日本への輸出どころではなくなってくる可能性がある。リスク分散を考えれば、④何でも1国からの輸入に依存するのはよくない。

もしも食料輸入が大幅削減あるいはなくなってしまうたら、国内生産を増やすことでこれまでの食生活を維持できるだろうか。それは不可能で、農林水産省の試算によれば、そのためには国内の総農地面積の3・5倍の農地が必要になるのだ。しかも現在ある農地すら有効利用されていない。将来は人口減による食料自給率の向上も考えられるかもしれないが、いずれにしろ近い将来に国産食材のみで食事をまかなっていかなくてはならない時代が来たら大変である。この場合、芋などを中心とした精進料理のようなメニューにならざるを得ない。そして、現在の国内生産量を人口に当てはめてみると、味噌汁は2日に1杯、卵は7日に1個、肉は9日に1食程度になるそうだ。B幸いにも米だけは自給率100%なので、ご飯食が中心となる。C献立が組まれる。

仏教の修行ではあたりまえの精進料理は、高カロリーの食事に慣れてしまった人にはだいぶ物足りないだろう。

そこで、このような時代の到来に備えて、仏教における食事について、その考え方に触れておくのも有意義だろう。仏教においては、食事は作る人と食べる人の両方にとって大事な修行のdイッカンだ。まず作る側は、どんなに材料がなくても手を抜くことはなく、限られた食材を大事にして工夫をこらし、心を込めて調理をする。食材そのものの味を生かし、その食材に感謝し、そして食事を作る喜びと、人をもてなす喜びを同時に心に感じるのだ。そして食べる側の修行僧は、その心を受け、食べる前に五観の偈というものを唱える。これは、

① 出された食事が出来るまでの手間と労力を思い感謝しよう。

② 自分はこの食事をいただくのに値する正しい行いをしたか反省しよう。

③ 食事をいただくのは心を正しく保つため、決してむさぼりなげないようにしよう。

④ 食事は体を養う良薬だと思つていただく。

⑤ 修行を成就するという目標の為に食事をいただく。

と、五つの内容だ。

これを見て分かる通り、質素な食事を決して我慢して耐え忍んでいるのではない。むしろ感謝しているのだ。我慢しなければならない、と考えてしまうと、このような食事を続けていくのは難しいだろう。人間は心の持ち方一つで大きく変わる事ができるのだ。したがって食料問題を考える際にも、やはり

⑤ 人間的要素がその解決の重要な鍵を握っている。

(西成活裕 『無駄学』 新潮選書より)

問一 —— 線 a 「ドウゲン」、b 「ソウテイ」、c 「献立」、d 「イッカン」、e 「値」のカタカナは漢字に直し、漢字はその読みをひらがなで答えなさい。

問二 —— 線ア「排出される」、イ「義務づけられる」、ウ「安定供給される」、エ「懸念される」の「れる」のうち、意味の異なるものを一つ選び、記号で答えなさい。

問三 —— 線①「農地が少なくなってきた」とありますが、この結果どのようなことが生じると考えられますか。本文の内容を踏まえて十以内で説明しなさい。

問四 —— 線②「経験的な判断」とありますが、ここでいう「経験的な判断」の具体例としてふさわしくないものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア、濃いピンク色になったモモを指で軽く押したところ、へこんでしまったので、食べるのを止めた。
- イ、少し色の変わったミカンを一房口に入れたところ、酸っぱかったので、食べるのをやめた。
- ウ、炊飯器に残っていたご飯に鼻を近づけたところ、いやなおいだったので、食べるのをやめた。
- エ、冷蔵庫に入ればなしの牛乳をのぞいたところ、どろどろとかたまっていたので、飲むのをやめた。
- オ、冷凍庫に入れていたお刺身を解凍して一切れ口に入れたところ、まだ冷たいので食べるのをやめた。

問五 —— 線③「資源の偏在」とありますが、どういうことですか。本文を踏まえて説明しなさい。

問 —— 線A「際だっている」、B「幸いにも」のそれぞれの意味としてふさわしいものを次のア～オの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

- | | |
|-----------------|----------------|
| A | B |
| ア、どうにか突出している | ア、うまいことに |
| イ、ひととき目立っている | イ、やっつのことだ |
| ウ、ぎりぎりぬきんでている | ウ、狙いどおりに |
| エ、はつきりと不利になっている | エ、満足なことに |
| オ、すべて浮きぼりになっている | オ、めったにないことながらも |

問七 —— 線④「何でも1国からの輸入に依存するのはよくない」とありますが、なぜですか。その理由を説明しなさい。

問八 —— 線⑤「人間的要素がその解決の重要な鍵を握っている」とありますが、左はこれを説明した文章です。空欄ア～ウにふさわしい語句を本文から探して答えなさい。

たとえば、食糧自給率が低くて、【ア】だけで食事をまかなわなければならないために【イ】な食事にならざるを得ないとしても、

心の持ち方一つで【ウ】の解決につながることは可能だということ。